

## 巻頭言

# ソーシャルワークにおけるアセスメントの意義

日本女子大学人間社会学部 渡部 律子

## 学生から教えられたこと

ソーシャルワーク教育に携わり20年以上が過ぎたが、今も私に強烈な印象を残している出来事がある。それは、アメリカのソーシャルワーク大学院で教鞭をとって間もない頃で、私は授業を受け持つとともに、実習指導役割も担っていた。そのとき担当した28歳の女子学生とのエピソードを今でも鮮明に覚えている。それは、ソーシャルワーカーにとって、クライアント理解がいかに重要か、そしてそのためには、「アセスメント」が必要不可欠であることを再認識させてくれたからである。少々長くなるが、彼女とのエピソードをご紹介します。

ある日、全米的にも有名な精神障がい者の地域生活サポートを行う機関で実習をしていた学生が、私の研究室の前に立っていた。「どうしても聞いてもらいたいことがある」と、思いつめた表情だった。とにかく研究室の中で話を聞こうということになり、部屋に入ってもらうと「私は高い授業料を払って、また、難関を潜り抜けてこの大学院にやってきた。それはソーシャルワーカーとして自分をみがくためだ。実習は其中でもとても重要な役割を占めていて、本当に期待をしていた。でも、今、私がやっていることは、言い方は悪いけれど、対象が大人に代わった、ベビーシッターと運転手だ。こんなことをするために大学院

に来たわけではない。」と話した。この学生はどちらかというといつも物静かな人だったのだが、我慢の限界にいるといった様子で、彼女の憤りが私にも伝わってくるようだった。

私は彼女の状況をよく知りたかったので、もっと詳しく説明をしてほしいと伝えると、次のようなことを話してくれた。自分が担当しているのは、地域での生活を始めてまだそれほど年数がたっていない男性で、最近、癌が見つかり、今その治療の最中である。実習生である彼女に課せられた役割は、このクライアントが通院する際に付き添っていくこと、その付き添いの前後に少しの時間クライアントと時間を過ごすということであった。この話を聞いた私は、彼女の実習で起きていることをロールプレイしてみようと考え、彼女がクライアント役、私が実習生である彼女の役をとることにした。まず、彼女がクライアントの家を尋ね挨拶をする場面から始めたところ、クライアント役の彼女は、椅子に座り不安そうに足をゆすり始めた。そのことについて尋ねると、「私が行くといつもこんな風に足をゆすって落ち着かない様子です」と話してくれた。これをきっかけに、クライアントのこれまでの生活史、性格、地域生活での様子、癌との向き合い方、そこに彼女が入ることの意味などを話し合うことになった。1時間以上続いた話し合いで、彼女は徐々にクライアント理解を深め、さらに自分自身の役割にも

気づき始めた。そして、「私、もう少し頑張ってみます」と言って私の研究室を去って行った。そして、それから1か月ほどたったある日、また私の研究室の前にたっている彼女の姿があった。今度は、前回とは異なり明るい表情であった。そして、「聞いてほしいことがある」と言って語ったことは、「この間クライアントが私にお茶を入れてくれたのです。そのことを言いたくて……」ということだった。以前の彼女であったら、お茶を入れてくれたことに目を留めたり、その意味を見出したりしなかったはずである。しかし、クライアントと自分の役割のアセスメントを行ったことで、「一見、何でもないように見える行動の意味」を見出すことができたといえるだろう。

## ソーシャルワークにおける統合的アセスメント

上で紹介したようなエピソードと似たようなことは、実習生指導や実践家のスーパービジョンでもよく経験する。自分がやっていることの意味が分からない、あるいは、支援が結果に結びつかないということである。そのようなとき、しっかりとクライアントを理解するための情報をもとにしたアセスメントをすることで、課題に気づき変化していくことが少なくない。ソーシャルワークのような対人援助職は、仕事の中身がブラックボックスの中に入っていて見えない、という批判を受けることがある。このブラックボックスの中を明確にするためにも、ソーシャルワーカーが、なぜこのクライアントにこのような支援をするのか、を明確に説明できるだけのアセスメントを実施しておくことが必要であろう。

Meyer (1995) によると、アセスメントとは、一般的に「知ること、理解すること、評価すること、個別化すること」を意味し、弁護士、医師、建築家など様々な専門職でも「いかに対象者の問題に介入するか、問題を解決するか」を見つけ出すことを目的に、情報を収集、統合し、さらに分析をして最適の解決法を探ろうとする活動である。

ソーシャルワークで、問題状況、対象者のニーズ、問題を取り巻く環境を十分アセスメントせずに支援法を提示して成功したとしても、それは「まぐれ当たり (hit or miss)」(p. 260) にすぎないと考えられ、アセスメントはソーシャルワークプロセスで最も重要な基本中の基本といわれている。しかし、残念ながら、十分なアセスメントを行うことなく、問題解決法を見つけ出そうとする傾向が少なくないことも現実である。

様々な対象領域に応用がきき、かつ、クライアントと問題との関連性の全体像を捉えることができるといわれているジェネラリストソーシャルワークで使われる「統合的アセスメント」の枠組みの重要性を再度認識する必要があるだろう。筆者は、大学での教育とともに福祉実践現場にいる人々のスーパービジョンや事例検討会に参加する機会を多く持ってきた。そこで、繰り返しアセスメントの重要性を訴え、クライアント、クライアントを取り巻く環境を再アセスメントすることで、つまり、まさに、個々のクライアントを大切に理解しようとすることで、実践が変化していくのを目の当たりにしてきた。

様々な人間行動理解のための理論を統合して作成された統合的アセスメント枠組みを筆者が整理し16項目にまとめたものを見ると(渡部, 1999)

- ①援助を求めた動機,
- ②問題の特徴,
- ③問題の具体的な内容(問題の始まり, 頻度, 問題が起こる場所や時など),
- ④問題に関するクライアントの考え, 感情, および行動,
- ⑤問題が日常生活に及ぼす影響,
- ⑥問題と発達段階・人生周期との関わり,
- ⑦クライアントの生育歴(成長過程で起こった特記事項や家族・近親者との関係など),
- ⑧クライアントのもつ技術, 長所, 強さ,
- ⑨クライアントの価値観・人生のゴール・思考のパターン,
- ⑩クライアントの問題理解に必要な医療・健康・精神衛生などの情報
- ⑪問題解決のためにとられた方法とその結果,
- ⑫問題発生に関連した人や出来事とそれらの影響(問題以外のストレスの存在も含む),
- ⑬問題に関与している人・システム,
- ⑭

充足されていないクライアントのニーズや欲求、⑮問題解決のためにクライアントが使える人的・物的資源、⑯必要な外部資源、が含まれている。

ここまでアセスメントの重要性を述べてきたが、この話をすると、アセスメントシートを使用すれば良いと勘違いされることがある。ここで強調しておきたいのは、意味のあるアセスメントは、アセスメントシートにみられる枠組みをもっているだけで実践できるわけではなく、クライアントとの適切な援助関係、相談援助面接力、などがあっ

て始めて可能になるということである。そして、前述した項目に含まれているクライアントの持つ強さや価値観を発見しようとする視点が重要なのである。

#### 参考文献

- Meyer, C. H. (1995). Assessment. Encyclopedia of Social Work. (19<sup>th</sup>. Ed.) NASW Press. 260-270.  
渡部律子 (1999) 「高齢者援助における相談面接の理論と実際」第1版, 医歯薬出版